

さらにまた花ぞ降りしく鷺の山法の筵の暮れ方の空

藤原俊成

普賢菩薩ふげんぼさつが東のほうからやって来ると、夕暮れの空からさらにまた蓮華れんげが降り敷くことだ。靈鷲山りょうじゆざんで釈迦しやくかが説法される法華会の終わりの頃に。

『千載和歌集』の勅撰にあたり、定家の父、為家の祖父として御子左家の礎を築いた藤原俊成。法華経を深く信仰し、右記の作も『法華経』末尾「普賢菩薩勸発品ほくはつひん」の冒頭部分の句に着想を得て書かれたものとされる。

従東方来、所経諸国、普皆震動、雨宝蓮華

普賢菩薩は白い象に乗る姿で表されることが多いが、ここではどのような様子でやって来たのだろうか。通過した諸国はみな震動して、蓮華の花が雨のように降り注いだのだという。靈鷲山は古代インドのマガダ国の首都近郊の山で、釈迦の説法が多く行われた霊場。仏花はすでに散り敷かれているので、普賢菩薩の登場によってその上にさらに蓮華

が降り積む。背景の空は暮れの移りゆく茜の色彩。うつとりと幻想に溺れてしまいそうな夢のような一幕を想像してみよう。

もとの経文には夕暮れであることを示す箇所はない。法会の最後の頃になって普賢菩薩がやって来たことを踏まえた表現と思われる。『法華経』全二十八章の最後の締めくくりであり、説かれた教えを総括し復習する「再演法華」に相応しい舞台装置が俊成の歌の力によって用意されているかのよう。

九十一歳の俊成が死の直前に雪を欲しがって食べたという有名なエピソードが定家の『明月記』に書き残されている。そして娘たちに見守られながら、暗唱していた普賢菩薩勸発品を滞りなく読経し「しぬべくおほゆ（死ぬ時だと思ふ）」と言って亡くなった。掲出歌を詠んだのは六十四歳なので、それから四半世紀以上も生きたことになる。和歌の家を守るために奮闘し、大病により出家し、『千載和歌集』を成した俊成の生涯の最期にはどのような景色が広がっていただろう。

(小島なお)

